ハッピーパラダイス

ユー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハッピーパラダイス

【Ｎコード】
Ｎ２７９１Ｙ

【作者名】
ユー

【あらすじ】
機械の代わりに魔法文化が発達した異世界［アーク］
モンスター・獣人・龍人・精霊・人間などの多種多様な生物が暮らしているその世界でとあるギルドが名をあげていた
その名は［楽園の巨塔］
ギルド系王道？ファンタジーです♪
激下手はご愛嬌（苦笑）

魔法説明？

魔法

階級

低級＜中級＜上級＜超級＜神罰級

ちなみにそれぞれの階級の難易度は一つ下の階級の魔法を同時に５種類出すのと同じレベル

属性

火＜水＜雷＜土＜風＜火

魔法一覧

純粋魔法

一属性の魔力のみで攻撃する魔法

火の球や放電等

属性付加

物質に魔力の属性を付加させる事で攻撃に特徴を付ける魔法

単純な例

火：熱や光で攻撃が出来るようになる

水：水での目眩ましや防御能力の向上

雷：攻撃の加速や痺れ等の身体異常

土：純粋な硬質化と重量の増加

風：切れ味の強化や遠距離斬撃

騒がしいギルド

ハア…ハア…
暗い森を抜けた先にその街はあった
「ここが…」
街に入った瞬間に全身で感じる熱気や活気。
その全てが気にならなくなる程の堂々とそびえ立つ巨塔
「あれが楽園の巨塔…」

最近急に名を上げたギルド［楽園の巨塔］
俺も名を上げる為にここに来た
ちなみに楽園の巨塔の付近では
盗賊集団突然壊滅したり
竜巻の中心で笑う少年を見たりといった怪現象が目撃されている

若干の不安を感じながら大きな扉を開けると最初に視界に飛び込んで来たのは…

「…樽？」

ガンッ…
「うっ…」

俺はそのまま意識を手放した。

若干の頭痛を感じながら目を覚ますとそこにいたのは…
オールバックの…

「…黒いおっさん？」

「…」

「……」

何故だから睨み合う2人

「…え～と」

逃げようかな…

「…」

ガシ…

「…ん？」

背中に違和感を感じた直後

ヒュン

「ヒュン？」

宙を舞う。

「え…」

宙を舞った直後落ちる場所に椅子が滑り込んで来た。

が、本来落下の勢いを殺して座らせる目的だったであろう椅子は鈍い音をたてて俺の背中とぶつかる。

「いきなりなんだよ！？」

うん、これは普通怒るべきだ

つていうかなんで俺は宙に浮いたんだ！？

風属性？いや風は感じなかったし勝手に浮いたみないな感じだったとか考えていると目の前の床が持ち上がって机のようになった。

「は？」

さらにその光景に驚いていると机の真ん中が更に膨らんで…

小さなおじちゃんが出て来た。

「よっ！」

小さいおじちゃんはこっちを見て笑顔で一言…

「入会を許可する。」

……は？

「まだ何も「言ってないのに～」」

なんだこのおっさん

「おっさんは無いだろ？」

また…

「心を読まれるのは気分が悪いか？」このおっさんどうやって…

そんな魔法聞いたことも…

「内緒。」

おっさんの笑顔って気持ち悪いな…

「…」

おっさんは涙目だ。っていうかこのおっさんは誰なんだろうか。

妙な力を持ってるし…

此処まで考えてから気付く。

「おっさん本当に人間か？」

「気付くのが遅い五点減点。」
ハッと後ろを見るとスーツ姿で黒い長髪の男が経っていた。
「それは俺だ」
意味の分からない事を言う男を眺めていると男が一言
「解」
後ろを振り向くとさっきの小さなおじさんは土になっていた
土人形ってあんなに精巧に出来るもんなのか…？
振り向くと男は人差し指を立てて一言。
「内緒。」
「あっそ」
返事を期待した俺が馬鹿だった。
「何だかごちゃごちゃしたが…」
唐突に男が話出す
「正式に、楽園の巨塔への入会を許可する。」
「え…審査とか「面倒くさい」」
キリッとした顔で言う事ではないが気にしないでおこう
「まあ書類は一応書かなきゃいけないけどな…」
と言われて一枚の紙を渡された
記入欄は、名前と身長と使用武器…だけ
「はい」
「えっと…リオン・ミルキーくん？」
「はい」
「じゃあギルドマスターの所に連れて行くね」
笑顔で放った一言がリオンに疑問をもたらした
「あんたがギルドマスターじゃないの？」
「俺は新人」
親指を立てる姿に呆れて一言
「じゃああんたの許可とか最初から「いるよ？」」
「新人なのに？」
「ギルドメンバーの紹介が入会条件だからね」

「…なるほど」
その時男が俺の腕を掴んで指を鳴らした
…瞬間景色が切り替わる。
明るくて広い部屋で目の前には誰もいない机が一つ
「今のは…「転移、超級空間魔法の一つだよ」」
「そんな事は分かってるよ」
意味が分からない…
詠唱破棄した超級魔法は普通ギルドマスタークラスじゃないと使えない筈
それをいとも簡単に使える
こいつ新人とか言いながら実質かなり強いのか？
「俺は下から2番目だよ」
「何人中？」
「確か～260人くらいかな？」
うん…意味分からん
そりゃこのギルド有名になる筈だわ…
「ちなみにギルドマスターは毎年ギルドで一番強い人間が勤めます」
うん俺無理。

その時再び視界が切り替わる
「…え？」
今回は男も慌てている
「ヤベ…解散！！」
「え？」
そう言われた時には男は消えていた。
解散…って言われても…
こうして俺のギルド初日は振り回されるだけ振り回されて終了した。

「あ…」

「どこで寝よう…」

ファーストクエスト

目を覚ますと周りには荒野が広がっていた。
「何だここは？」
俺は地面に横たわっている
「夢…か？」
目の前には嵐が吹き荒れ、
その中にはっきり見える白くて大きな…
「…龍？」

その姿を最後にまばたきと共に景色が変わる

……

目の前には机。
昨日寝る所が見つからなくてギルドで寝ていたのを思い出す

「…何だったんだ？あれ…」
確実に見たことが無い上に夢にも関わらずはっきりと覚えている

ほぼリオンの勘だがあれはモンスターではない。
モンスターとは今まで見た物も聞いた物も全て醜く、龍のような洗練された姿を持つ物など知らない
リオンの記憶には一つの種族が浮かんでいた

「…龍人？」

浮かんだと言ってもリオンは龍人を見たことが無い

しかし、文献で読んだ事もある、旅人の話でも何度も聞いた
その結果勘で断言する。
あれは龍人だ。
「…綺麗だったな。」
夢であってもはっきりと嬉しいと思う。
それほどに夢の中にいた龍は美しかった

「…よっ！」
昨日の黒スーツ襲来。
今のリオンの状態を表すなら

ビックウウウ！

だろう

「…え？」
リオンは戸惑っている！
黒スーツの攻撃！
ほほつねり！
リオンに１０のダメージ！

「…いつからいたんだ？」
うん、きっと俺は今怒るべきだった。
「最初から。」
そして今も俺は怒るべきだ
…ゴン！
「声かけろよ！」
「痛いんですけど～～！」

「知らんわ！」
「いや～流石にまさかお前に独り言癖があるとは知らなくてな…」
黒スーツはニヤニヤしている！
リオンの心に１０のダメージ！
「……」
ヤバい…今の俺凄くハズい…
「見れば分かるよ。」
黒スーツが心を読めるのを忘れていた…
黒スーツは再びニヤニヤしている！
リオンの心に２０のダメージ！
リオンの心が折れた！
「…もうやだここ…」
「まあそう嘆くな。」
そう励ます黒スーツはニヤニヤしている
ここで黒スーツを見ていたリオンはある事に気づく
「そういえばさ…」
「ん？」
「名前何？」
「…」
「…」
「…言ってなかった？」
「うん…」
「ミック…ミック・ゲイルだ」
「ミックミックゲイル？」
リオンはニヤニヤしている
「ミックゲイルだ」
「ミックって二回言ってなかった？」
リオンはニヤニヤしている
「…」
「…」

しばしの沈黙…
「…格好付けただけだ文句あるかぁぁ！！」
ミックの心が壊れた！！
「五月蝿いぞゴミ屑が！！」
グシャッ
ミックの頭が消える。
そして代わりに女性の顔が目の前に現れる。

「全く…出るタイミングくらい作らんかど阿呆が！」
「…すみません」
ミックの最後の言葉が謝罪とは。
とりあえず手を合わせておこう
ここで女性が一言
「…ん、何してる？新人」
「黙祷。」
女性は笑い転げている
ミックは立ち上がった
「マスター、いじるのはそろそろ止めて下さい…」
「おうそうだな」
「え…」
「「どうした？」」
「…あんたが…マスター？」
「なんだ聞いてなかったのか？
私が楽園の巨塔ギルドマスター
アーク・ライムだ。」
ギルドマスターって…
「…あんたなの？」
「今言っただろう。」
「って言うか…」
「何しに来たの？」

タイミングがどうとか言っていたから俺に話があるのかもしれない…

「…意外と勘は鋭いんだな。」

そういうとマスターはニッコリと微笑んだ後一言。

「これよりリオン・ミルキーに最初のクエストを言い渡す。」

ここからリオンの世界は加速する…

「とりあえず寝床見つけさせて下さいよ」

…加速するはず。

合成魔法

俺はマスターが宿を支給してくれるという事で今ミックと共に森の中を歩いている
「なかなかいないな…」
「そりゃ討伐対象がゴロゴロいたら新入りに受けさせてくれないだろ。」
クエスト内容
[武者首ジェット５０体の討伐]
「初クエストが最高に嫌なんだが」
「俺もだ、諦めろ」
武者首ジェット…
人の首だけのような魔物で人を見つけると突進せずにはいられない
最高に意味不明で迷惑な魔物。
ちなみにてっぺんハゲ
「絶対トラウマになる事間違いなしの魔物の群れか…」

そうこうしながら歩いていると森の中で少し開けた所に出た
「ホキョ。」
「…何か言ったか？」

「今のは…武者首ジェットか。」
そういうとミックはすぐさま声のした方向に木の枝を投げつけた
「ホキョキョキョキョキョキョキョキョ！！」
枝は命中したらしく、いたる所で武者首ジェットの声がする。
囲まれたようだ…が。

不思議と気持ち悪さしか生まれない
「…無理…我慢出来ん！！」
「「ホキョ！！」」
ミックが気持ち悪さに負けたのか魔法を使おうとする…が二体の武者首ジェットの突進に阻まれる。
武者首ジェットは地面に突き刺さり…地面を掘り進んで別の所から飛び出す。
この間約3秒。
素早く、迷惑で、気持ち悪い
武者首ジェットにいい印象を持つ者はいないだろう。

「リオン…」
「こんな時に何？」
「お前の出番無くなってもいいか？」
「最初からなくていいよ。」
「武者首ジェット…特別に俺の樹海魔法で殺してやる。」
ミックはそう呟くと両手を武者首ジェットにかざし魔法の詠唱を初める
「母なる大地よ、今我に炸裂の巨塔を貸し与えよ…［バベル！！］」
次の瞬間前方から直径１０メートル程の大樹が高速で突き出し、爆発した。
「ホキョ…」
武者首ジェットは跡形もなく吹き飛んだ。

「…よし、帰るか」
「まて…」
俺はミックの肩をしっかりと掴む。

「ん？どうしたリオン」
「…樹海魔法って何？」
「…合成魔法を知らないのか？」
「何それ？」
なんだか良く分からない名前が出て来た
合成魔法？
「聞いた事もない。」
「そうか…」

ミックは少し首を捻った後
「マスターに聞け」
とだけ言った。

「…了解。」

こうして俺の初クエストは一切俺の出番の無いまま終了した。

「…報酬貰えるかな。」

魔法説明？

合成魔法

異なる2つの魔力を混ぜ合わせて放出する事で複数の性質を強化又は変化させた魔法の事。
複合属性とも言われる

物質属性
最低階級：上級

火・土＝鉄
水・風＝氷
土・水＝木

現象属性
最低階級：超級

火・雷＝光
水・風・土＝嵐

これらの他にも属性の割合を調整する事で無限に属性は生まれる。

創造魔法
素材や工程を必要とせず一瞬で物質を作り出す魔法。

代表的な使用法：錬金術

空間操作魔法
大量の魔力で強制的に空間を別の空間と繋げる魔法。
物質を収納したり攻撃の向きを変えてカウンターに使うなど様々な技が使える。
代表的な使用法：短距離ワープ・進行方向変更・召喚術

腕試し

ギルドに帰ったリオンはマスターから合成魔法の特徴を聞いた
ちなみにミックの樹海魔法は土属性と水属性で木を作り出し風属性で魔法の範囲を広げた物らしい。
ここまで聞いた所でリオンは呟いた
「俺も人並み以上には魔法を使える筈だったんだけどな…」
この只の呟きはマスターに聞こえたようで…
「そうか…なら一発戦ってみるか？」
マスターはニンマリと笑っていた。
ちなみにミックはマスターの後ろで合掌している。

…２０分後…

「さあ着いたぞ」
マスターに着いて行って約２０分…
リオン達はギルドの近くにある闘技場のような施設にいた。
「でか…」
「この闘技場な…マスターが要らない機能を付けまくってるから気を付けろよ…」
耳元で囁かれたミックの一言で急に不安になるリオン。
恐らくマスターには聞こえただろうが一切表情を崩さず問いかけて

きた。
「お前の得意属性はなんだ？」
「え…雷と火ですけど…」
「そうか…」
マスターの笑顔にやや固まり…
「さあ私に一撃いれてみろ！」
さあ来いと言わんばかりに開いた手の風圧で周りの壁の至る所にヒビが入る
マスターの前には引きつった笑顔のリオン…
「うん…無理…」
「安心しろ…お前の苦手属性しか使わないから。」
この時リオンは悟る。
「遺書書いとけば良かった」

「はあ…何でギルドマスターなんかと…」
「…来ないならこっちから「行きます！」…そうか」
マスターから来た時点で負けは確定してしまう…
「マスターは水と土の属性しか使わないんですよね？」
「…？…そうだ…」
よし…
リオンは腰から一本のナイフを取り出し魔法を発動した
「飛燕（ヒエン）！！不眠夜焔（ヨネズホムラ）！！」
右手に持ったナイフの先からは小さな炎が、左手からは白い炎が生まれる。
「ほう、雷は使わないのか？」
「…内・緒！！」
叫びと共にリオンが横一閃にナイフを振るとナイフの通った所から5つのツバメ型の炎が生まれる
更に左手をナイフの軌道をなぞるように振ると5つのツバメが白い

炎に包まれてからマスターに向かってバラバラに飛んで行った
「ふん…悪くないな…だが遅い、水壁…ん！？」
マスターが分厚い水の壁を前方に出したにも関わらず、リオンの出したツバメはその壁を突き抜けて更に加速する。
「な…」
マスターが５つの爆発で完全に見えなくなり、リオンが勝ちを確信した瞬間。
「応用力もそれなりにあるな…が、油断大敵だ」
「え…」
振り返る間もなく後ろから来た衝撃に吹き飛ばされる。
「大方ツバメ型の爆発する炎を水を燃やす炎でコーティングして雷属性の加速を利用して打ち出したって所だろうが…」
マスターはリオンを品定めするように見てから呟く
「この魔法はお前のオリジナルか？」
「…一応」
「よし…不合格だ！」
「…え？」
「まあ不合格と言っても今から言う課題をこなせば合格にしてやろう。」
「…課題？」

〜助かった…いきなり不合格にされる所だった…〜

「今から一週間後までにオリジナルの魔法を一つ作ること…但し雷と火の合成魔法に限定する。」
「…無理じゃ…」
「ほう…それなら…「やります！！」よろしい。」
マスターが拳を握るだけで簡単に意識を変えるリオン。
後ろでは扱いが空気となったミックがチキンと呟いている。
「それじゃあ一週間後、この場所で」

「はい…」
リオンの返事を確認するとマスターはミックを連れて転移でどこかに消えて行った
「はあ…普通に考えて無理だろ…」
一人残されたリオンは一言呟いて帰っていった

特訓2

はあ…

リオンは憂鬱を感じながら街を歩いていた。
「そもそも光属性の魔法ってあるのかよ…」

リオンがそう思うのも無理はない

何故なら合成魔法の中でも火と雷の合成魔法…光魔法は直進する速さが最速ではあるが威力は最弱、特殊な能力も全く無いからだ。

「光魔法のオリジナルってないだろ…」
光魔法はその直進しようとする特性から針の形にして数の力に頼るしか無いと言われている

「はあ…」
今日のリオンはよく溜め息をつく。

そんな事を考えていると真横の窓から男が飛び出して来て手近にいた男の首にナイフを突きつけて盾にした

盾にされた男は当然の如くリオンである。
「何でこんな時に…飛雀」（ヒジャク）
リオンは指先から2センチのどの飛燕を作り出し、男に向けた。
二匹の雀は獲物を見つけたと言わんばかりに男の服を燃やした。
「不眠夜焔・一閃」
リオンが手をかざすと細く伸びた白い炎が男二人を焦がした。

「もう3日しか無いのに…」
リオンは男二人を軽く焦がしながらも新しい光魔法を考えていた。

しかしそんなに簡単に行くはずもなく…
宿にしているギルドに戻る。
「っていうか合格してないのにギルドに泊まってていいのかな…」
リオンがそんな事を考えているとランプ代わりに使っていた光魔法の球に魔力を込めすぎたようでいきなり強い光を放って消えた。
「暴発かよ…俺とことん才能無いのかな…」
此処に来る前はリオンは遠い国のギルドでエースの立場にいた。
しかし人より多かった魔力に頼っていて魔法の訓練をサボっていたため、初歩的な魔法以外は飛燕と不眠夜焔を含めて４つ程しか魔法を使えない。

「あれ…でもさっきの暴発の時…光が拡散してたよな…もしかすると…」
しかし自信が無くなっても実力が無くなる訳ではない
リオンの魔法はこ小さな小さな暴発により進化する事になる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2791y/

ハッピーパラダイス

2011年12月24日01時58分発行